

大航海時代の旅行記文学

直野敦

ルネッサンスにいたるまでのヨーロッパ人たちは、主として中央アジアを通じて東方との交渉を持ち、彼らにとって海とは、ほとんど地中海と同義語であった。ギリシア、ローマの古典文化の時代においては、黒海の沿岸地方でさえ文明世界の辺境に過ぎなかつたことは、トミス(現在のルーマニアの港コンスタンツァ)に流刑になつたオヴィディウスの『悲歌』によく表現されているし、ルネッサンスまでの時代において、アレクサンダー大王のように西から東へ、あるいはアッチラのように東から西へとその版図を拡大した場合にも、それは主として陸路を通じて、ユーラシア大陸の一部が政治的に統一されただけで、それぞれの世界の周辺には未知の世界が拡がっており、その未知の世界については、さまざまの空想

や夢物語が流布していた。ルネッサンス以降、このように未知の世界として残されていた空間への航海によって、中世末期に地中海世界に閉じこめられていたヨーロッパ人たちの閉鎖的な視野は拡大され、地中海世界と全く異質な世界、アジア、アメリカなどの非ヨーロッパ世界との接触は、ヨーロッパ人の心理、感受性、認識に大きな衝撃と変化をもたらした。そして、その衝撃や変化は、ヨーロッパ人がはじめて接触した未知の世界での出来事を描いたさまざまの旅行記、報告書の中に具体的なイメージとして記録されたばかりでなく、新しい世界での多様な現実にたいする凝視と人間性にたいする理解の深まりは、それまでの固定化した閉ざされた世界感覚に比べて全く新しい敞しいリアリストの目を培つたということ

ができるし、そして、そのような目が外から内へ、地中海世界の内部の現実へと向けられた時、ピカレスク小説をはじめとするヨーロッパの近代リアリズム文学の方法となったと考えることができる。もちろん、この時代の旅行記や航海記はほとんどの場合文学的意図を持って書かれたものではない。にもかかわらず、そこに近代ヨーロッパのリアリズム文学の源泉のひとつがひそんでいることは疑いをいれないし、このような旅行記、航海記に表現されている現実認識への努力が近代のヨーロッパ文学に及ぼした影響は否定することができない。

—

以下の小論では、そのような立場からこの時代の旅行記や航海記がヨーロッパ文学にもたらしたものに触れてみたいと思う。

ルネッサンス期までのヨーロッパ人にとっては、海とはほとんどの場合地中海を意味し、ジブラルタル海峡の外の大洋は、未知の暗黒の世界であり、そこにはアトランティス大陸の神話をはじめ、地中海世界の人々のさまざまな夢を掻き立てる未知の、暗黒の大洋が広がっている。

た。この未知の世界へ乗り出して行こうとする動きは、まず地中海世界の中で東西貿易の中心であったイタリア人たちの間に生まれ、それは、すでにダンテの『神曲』地獄篇第二十六歌のオデッセウスの冒険として描かれた次の一節にも表現されている。

「……

そして船尾を日出ずる方に向けると、

懼をこの狂気の疾走の翼として、

常に左手へ左手へと南下した。

夜になればもう南半球の星々が次々と見え出した、

そして北極星は低くなり、

やがて海原の外へのぼらなくなった。

われわれが大海へ乗り出してから

月は五たび盈ち、

また五たび虧けた。

その時はるかかなたに褐色の山が一つ

現われた、かつて見たこともないほど

高い山のように思われた。

私たちは歓喜したが、歓びはたちまち嘆きに転じた、

この未知の土地から竜巻が捲き起こり、

船首の一角に衝き当たると、

三たび船体を周囲の水とともに旋らし、

四たび旋らすに及んで船尾を高く持ちあげるや、

船首から、神の御意のままに、船を沈めた。

やがて私たちの上には海がまたもと通り海面を閉ざし

(1) た」

ここには、大航海時代へ向おうとするルネッサンス期ヨーロッパ人の冒険心と、そして同時にその冒険の目ざしている未知の世界にたいする恐れとが表現されている。

ダンテの時代からほぼ一世紀後、十五世紀になって地中海世界の人々の大洋への挑戦は現実のものとなる。ポルトガルのエンリケ航海王子の指導の下に、はじめて大西洋への航海が実現される。しかし、まだ航海技術の未熟な当時においては、まさに『神曲』の中のオデュッセウスのように多くの船が海難に遭い、多くの人々が難破による悲劇を体験しなければならなかった。その結果、いくつかの「海難史」や「海難物語」が編まれたばかりでなく、海難はルネッサンス期の文学の主要なモチーフのひとつとなっている。そこでこの時代の旅行記文学に難破がどのように描かれているかを見ることにしよう。

もちろん、海上における船の難破のモチーフは、古典古代の文学からすでに存在していた。

その一例として、ヴェルギリウスの『アイネイス』の第一巻における暴風雨の場面や、アキレウス・タティオスの『レウキッペーとクレイトポーン物語』第三巻の難破の場面などをあげることができるが、ルネッサンス前期の文学における難破の描写を見るために、ボッカチオの『デカメロン』の第二日第四話のランドルフォ・ルッフォロの海難の場面を引用してみよう。

「……しかし夕方になると、暴風がおこって、海が大荒れに荒れましたので、二隻の大船は別れ別れになりました。そして、不運な、気の毒なランドルフォが乗っていた大船は、この風のために凄まじい勢いでチファロニア島にある岩礁に打ち当り、まるで壁にうちつけた硝子細工のように、口を開けると、粉みじんになりました。こんな場合によくおこることでございますが、海面はもう浮いている商品や、木箱や、板子で文字どおり一杯でしたので、夜は真の闇で、海は荒れ狂っておりましたが、泳げる者は泳いで、偶然眼の前に漂ってくる物にしがみつきました(2)」

ボッカチオ以前の作家たちにおけると同じように、こ
こでも、嵐がおこり、船が粉微塵になり、その破片が波
間にただよい、難破した人々が波と格闘するという風に、
完全な漸層法によって描写が展開する。しかし、まさに
このように各部分が完全な調和をもって描写されている
点に、嵐と難破の描写にとつて固定化された文学形式の
及ぼす制約、束縛があらわれているとも言えるので、大
航海時代のヨーロッパ人の体験とその体験をもとにした
記録はこのような制約を打ち破って新しい現実認識と現
実描写をもたらすことになる。

新しい時代の海難の描写は、十八世紀にベルナルド・
ゴメス・デ・ブリトの編纂した『海難史』に収められた
多くの記録に見られるが、ここでは十六世紀のマヌエ
ル・デ・メスキタ・ペレストレロの筆になる「サウン・
ペント」号の難破の一節を引用してみよう。

「……この時、海面は、難破の不幸な瞬間にその場に
放り出された木箱や、船体の破片や、樽や、積荷や、そ
の他無数のありとあらゆる物に覆われて、まるで凝結し
たようになっていた。そして、陸地へ向って泳いでいた
多くの人々といっしょにすべてがぶつつかりあって、一

人一人が海の狂乱によって殺されて行く様子、そして破
滅して行く人々のありとあらゆる種類の死にざまは、見
るも恐しく、語るも悲惨な情景であった。どちらを見て
も、目に入るのは、もう泳げなくなって、海の水を呑み
すぎたあまりに恐ろしい苦しい断末魔の喘ぎをあげて
いる人、あるいは、もう力尽きて両手をさし上げ、神の
助けを心に念じながら、最後のひと掻きをしたあげく、
水の底へ沈んで行く人々の姿ばかりであった。また、あ
る人々は、万力のように両方から身体にぶつつかって来
た木箱によって押しつぶされて息絶え、あるいは苦し
みのあまり発狂してもがいているうちに波で岩に打ちつけ
られて絶命し、またある人々は、船の破片や板切れに打
ちつけられて釘に身体を突き刺され、貫かれて、そのた
めに、あちこちで、水面はこうして死にゆく人々の傷か
ら流れ出たおびただしい血で朱に染っていた。……」⁽³⁾

「岸辺は……見るもおぞましい、醜悪な恰好をした死
体で一面に埋まり、あるいは岩の上に、あるいは岩の根
元にも横たわっているその様は、人々がどんなに苦しい
死に方をしたかを雄弁に語っていた。しかし、多くの人
人は、その肉体のうち、腕や、足や、頭などしか残って

いなかった。そして、顔が、砂や、船の残骸や、その他の物の下敷きになっていく者も多かつた⁽⁴⁾」

ボッカチオとベレストレロの難破の描写はきわめて似た要素を持っている。海面が船体の破片や木箱によって覆われる描写はほとんど同一である。しかし、それにもかかわらずボッカチオにおいては、その場面がいわば概括的に、俯瞰的に最初からとらえられているのに対し、ベレストレロにおいては、「海面は……まるで凝結したようになっていた」という、その場にいる人間の主体的な知覚、主観的なイメージを通じてとらえられる。そのため、ベレストレロにおいては、現実認識はより複雑なものとなり、意識のさまざまな次元に投影されることになる。そして、細部の描写においても、より個性的、具体的な方向へ深められて行く。そして、波間に漂う人々のそれぞれに異なる死にざまは、この場面全体に深い悲劇的な迫真力を与えている。

もちろん、ボッカチオにおける語り手が難破の体験者でなく、全体の叙述が語り伝えの形になっているという文学形式上の問題も考慮すべきであろうが、しかし、ベレストレロにおけるような難破の描写がそれ以後のヨ

ロッパ文学における描写方法のひとつの典型となっていく点で、この時代の航海文学の意味は大きいと言わねばならない。

二

ヨーロッパの中世人の世界像がどのように閉鎖された、狭い世界認識によって歪められた空想的なものであり、それが人文主義者たちの努力によって、また、自然認識の発展によって次第に訂正される方向へ向かいながらも、その歩みがいかに遅々としたものであったか、そして究極的にはアコスタの『新大陸自然文化史』のような客観的な地誌研究などが積み重ねられる中で、怪物グリフォンや頭のない人間などに満ちみちた中世的世界像が崩壊して行くかという問題についてはすでにこれまでも論じられてきた⁽⁵⁾。そういった中世的認識の狭さに制約された伝説のひとつが『プレスター・ジョン』の伝説であった。十四世紀のマンドヴィルの『東方旅行記』にも現れるこの空想の国には、恐らくキリスト教の東方への伝播に関連した若干の事実も反映しているが、また同時に、中世の閉ざされた世界での民衆の願望、空想、夢の生み

出したものでもあったろう。マンドヴィルのプレスタ
ー・ジョン王の国に出てくる寶石や黄金でできた宮殿、
ぶどう酒や乳や蜂蜜の湧き出る井戸などは中世的なイメ
ージであり、ルネッサンスの文学や絵画にも登場してく
る豊饒な食物の夢を無邪気に表現するものであろう。そ
して、この夢やアトランティス大陸の伝説などが、冒険
と探険の旅へと人々を誘い、大航海時代の到来にある程
度寄与したことは一般に認められている通りである。さ
らに、その結果として、ポルトガル人の東アフリカへの
探険は遂に彼らにアビシニアの土地とその王国に接触さ
せ、こうして、ポルトガル人はアビシニアに幻の王国を、
そして、この国の皇帝にプレスター・ジョンを見出した
と信じることになった。その後、ポルトガルとアビシニ
アとの間には政治、宗教の面での接触が続くが、一五二
〇年にこの国に入った使節団の一人フランシスコ・アル
ヴァレスの書いた記録『一五二〇—一五二七年のアビシ
ニアへのポルトガル使節団』は、中世の幻影がいかに大
航海時代のより広い世界との接触によって無残に打ち碎
かれて行くかを語る記念碑とも言える。彼はアビシニアの

一地方の修道院とその周辺の住民たちについて次のよう
に書いている。「夜になると、彼らもまた他のだれであ
らうと、この地方にいる野獣が恐しくて家から一歩も外
に出ない。そして、きびの番をする者たちは、樹木のず
っと高い上の方に身を横たえる場所があり、そこで夜、
眠りもする」黄金や宝石が谷間に散らばっていたマンド
ヴィルのプレスター・ジョンの国に比べて、これはまた
言いようもない未開の状態である。また、自然が人間の
生活に及ぼす猛威、いなごの大群による広い地域の荒廃
が抑制された、リアリスティックな文体で描かれるとき、
未開の状態の中に生きる人々の悲惨な生活の描写はさら
に激しい力で読者の心を打つ。「私たちは完全に完廃し
た土地を五日間もかかって旅して行った。……小麦も大
麦もまるで一度も種まきされなかったかのよう跡かた
もなく、樹々には一枚の葉も残っていない、柔かい枝はみ
な喰いつくされ、草などはその影さえなかった。……私
は、男や女や子供たちが恐怖に顔をひきつらせて、この
いなごの群の間に座りこんでいるのを目にした。私は彼
らに『お前たちはどうしてそこに座って死ぬのを待って
いるのか、なぜ、この獣どもを殺さないのか……』と尋

ねた。彼らは、『神が彼らの罪の故につかわされた災厄に刃向う勇氣は持っていません』と答えるのみだった」⁽⁷⁾ここでは、自然の災害の悲惨さだけでなく、それにたいする人間の態度、意識の面における受動的な忍従の態度まで鋭くとらえられている。そして、これが有名なブレスター・ジョンの王国の真の姿だったのであり、大航海時代がもたらしたより深い現実認識のひとつであった。そして、それはフランシスコ・アルヴァレスの旅行記にひとつのリアリスティックな文学的表現として定着されている。

このような幻想の打破、神話の破壊は大航海時代の初期には、ヨーロッパ人たちに衝撃的な認識となったであろうが、やがて、そのような幻滅、未知の世界との接触から来る衝撃的認識などが繰り返されるにつれて、ヨーロッパ人の心理、意識の中には、そのような新しい事実を次々と受け入れて行こうとする態度が培われて行く。そして、そのようないわば平常心となった開かれた態度においては、異質の世界の珍しい風俗、習慣、生活、心理は、その背景とともに冷静な態度で理解され、評価されることになる。そのような立場で書かれた記録文学の

ひとつとしてフェルナウン・メンデス・ピントの『巡歴録』がある。その一節には、鉄砲の日本伝来の際の様子が描かれていて興味深い。さらにこの書の四五章で、豊後の若殿が鉄砲で負傷し、著者自身がその罪を問われて殺されそうになる前後を描く場面は、風俗、信仰、言語、生活様式の違いを越えて、作者自身と若殿との間に人間としての相互理解が成立し得ることを示唆しており、作者の異国人にたいする開かれた態度がうかがわれる。

そして、そのような作者の冷徹な眼は、異国における作者を含めたポルトガル人たちの振舞いにも向けられ、ある場合にはポルトガル人たちが相互の激しい不和と口論が昂じて殺しあいまで起きそうになり、その野蛮さに原地人が呆れてしまうといった場面がある。ここでは、野蛮人はヨーロッパ人の方であり、作者の眼には東洋人の方が人間的には優れたものとして映じている。そして、そのような眼が、ヨーロッパ人の原住民にたいする掠奪や大量殺戮などに向けられる時には、それは抗議と告発の文学へと転化して行くが、それについては、さらに後に簡単に触れることにしたい。

三

異国に進出したヨーロッパ人たちは、彼らにとって常に有利な状況の中で、侵略者あるいは支配者として行動したわけではない。航海の途中、あるいは目的地での様子の予期しない出来事によって不幸な状況の中に追いこまれ、あるいは極限的状況の中で悲劇的な最期を迎えた人々も多かった。そして、そのような人々の運命は生き残った人々の報告によって本国に伝えられ、ある場合には航海の記録として後世に伝えられ、また、いくつかの文学作品の中へとり入れられている。中でも、喜望峰まわりのアフリカ航路で難破した人々の運命をたどった『一五五二年のナタール地方における大ガレー船』『サン・ジュアン号』の難破』の記録は、船長マヌエル・デ・ソウサ・セプルベダとその家族をふくむ一群の人々の悲劇的運命を格調の高い文体で綴った航海文学のひとつであり、それはポルトガルの国民詩人カモンイスの叙事詩『ウス・ルジーアダス』の第五歌にも歌われている。デ・ソウサたちは難破して南アフリカのナタールの地に上陸した後、原地住民のカフィル人の数度にわたる攻撃

を受け、また武器も取りあげられ、散り散りになって飢えと渴きにさいなまれながら未知の土地をさまよっている。そして最後にわずかの人数になっていくところをカフィル人たちに襲撃されて、みんな着ているものを取りあげられて、素裸にされてしまう。「その時、レオノール夫人は裸にされまいとして、両手の拳をふりあげて必死に抵抗したということである。……レオノール夫人は、自分がすっかり裸にされてしまったのを見ると、彼女はすぐにその場に座りこんで、長く垂れ下っていた髪でその裸の全身を掩った。そして、砂に穴を掘って、腰までその中に隠すと、そこからもう二度と立ち上らなかつた。……もう、マヌエル・デ・ソウサは、かなり意識が乱れてはいたが、それでも、自分の妻と二人の子供たちが飢えて、ものを食べたがっていることを忘れはしなかつた。彼はカフィル人のために足に受けた傷でびっこをひいてはいたが、それでも、妻子のための食べ物を見つけようとして、果物を探しにジャングルの中へ入って行った。そして彼が帰って来た時には、レオノール夫人が飢えと号泣のせいですっかり衰弱しているのを見出した。というのも、カフィル人に裸にされてからずっと、彼女はそ

の場から一度も立ち上ろうとはしなかったし、泣き止むこともなかったからである。そして、彼は子供のうちの一人が死んでいるのに気づき、自分の手でその亡骸を砂の中に埋めた。次の日、マヌエル・デ・ソウサは再び果物を探しにジャングルへ入って行った。そして帰ってきた時には、レオノール夫人ともう一人の子供が息絶え、五人の女奴隷が彼女の上にかがみこんで激しく泣き叫んでいた。……しばらくして、彼は立ち上り、女奴隷たちの手をかりて、砂に穴を掘りはじめた。そして、無言のまま妻と子供の亡骸をそこに埋めた。……それが終ると、女奴隷たちに全く口をきかずに、それまで果物探しに出かけたと同じ道をたどって、ジャングルの中へ入って行った。そして、それ以後、彼の姿を見た人はだれもいなかった。」⁽⁸⁾

この劇的な緊張に満ちた場面が、さきにものべたようにカモンイスに靈感を与えたのであるが、女性が自分の裸身を人の眼にさらすことを最大の恥として受けとめるというテーマは、古くからの文化的伝統を前提としており、ギリシア神話や聖書の中にもすでに現れている。しかし、この場面のレオノール夫人の苦悩は、大航海時代

の現実には特有の悲劇を表しており、二つの異質の世界が衝突する、すなわち地中海文化圏の伝統の中に生きる人間と、そういう文化にまったく無縁な風俗習慣の中に生きる人間とが衝突する場に生れている所に本質的な新しさがあり、また、それを刻明に伝えようとする筆者の文体にも、その新しい現実を注視し、リアルにとらえようとする新しい精神が感じとられる。近代のリアリズム文学は、このような広い開かれた世界での人間の悲劇をも真向から見ずえることによって、その内容を豊かにして行くのである。

マヌエル・デ・ソウサの場合には、ヨーロッパ文化圏から外へ出た人間の悲劇であるが、ヨーロッパ文化圏と異なる世界の人間が、ヨーロッパ圏の人間と接触することによって生じる悲劇、犠牲者としての悲劇の描写については、さらに後に述べるとして、日本とヨーロッパとの接触から生まれた特殊な状況と、その中での新しいタイプの悲劇の問題について、若干触れておきたい。言うまでもなく、クリンタンの殉教の問題である。日本におけるヨーロッパ人宣教師や、日本人キリスト教徒たちの殉教は、東西文化交渉史や日本キリスト教史などの立場

から研究されてきたし、また、日本の近代文学にも、芥川竜之介や遠藤周作をはじめ多くの作家たちに題材を提供しているが、一方、ポルトガルやスペインのこの時代における記録文学という立場から、この時代に宣教師その他の日本在住のヨーロッパ人によって書かれた記録や報告書を読むこともできるであろう。例えば、その生活について詳しいことは分らないながらも、日本におけるキリシタン迫害の初期に日本に滞在し、自分の直接見聞した事実をもとにいわずその当時の日本現代史の一側面を書いたアピラ・ヒロンの『日本王国記』には、殉教の具体的な事実が鮮かな筆致で描き出されている。例えば、その第二十章における城原兄弟の殉教の場面などがそれである。処刑の場面には次のような数行がある。「……他の連中は二人の兄弟のところへ行き、まだ青い藁縄で、それぞれ杭へかたくしばりつけ、いましめの縄があまり早く燃えないように、それへ泥をぬった。それが終ると、彼らは薪に火をつけたが、それはたちまち燃えついて、雲へとどくほど焰をあげて燃えあがりはじめた。すると聖なる殉教者は、嘆声も、うめき声も、叫び声も発しないで、これという身動きひとつせず、じっと杭を抱いた

ままで、何ものをも焼きつくす焰に窒息して、彼らの幸福な霊を、主のもとへ送り、主のために、かくばかり恐ろしい死を遂げたのである。」⁽⁹⁾

殉教というもったも悲劇的な場面のひとつを描きながら、しかも筆者の眼は、「青い藁縄」も、それにぬられた「泥」をも見落さずにいる。恐しいばかりのリアリストの眼と言えらるであろう。もちろん、一方では信仰に關連した奇蹟などの描写も出てくるけれども、しかし少なくともアピラ・ヒロンの書物ではそれは最少限の地位しか占めていない。大航海時代に外の世界の現実に触れた人々の中には、聖職者であると俗人であるとを問わず、このような新しい現実感にあふれた人々は少なくなかった。このようであり、そのような現実感、現実認識がひるがえってヨーロッパの現実へと向けられた時、まさにこのような殉教を生み出した宗教そのものへの批判もなった場合もあるだろうと思われる。この時代のポルトガルやスペインは決して宗教裁判によってのみ象徴されるような暗黒一色に塗りつぶされた国でなく、大航海時代の先頭に立って活躍した人々の中には、たとえ聖職者でも外の世界へ向って大きく開かれた態度を持っていた人もいた

のである。それは次に述べるようなヨーロッパ人の植民主義にたいする抗議が多くの場合聖職者の側から発せられたことから理解される。

四

大洋を渡って新しい大陸、新しい世界を発見したヨーロッパ人たちは動かした動機はきわめて多様であったが、飽くことない黄金と富への欲望もそのひとつ、しかもきわめて重要な動機のひとつであった。そして、それが個人の冒険家の野心であった場合にはもちろん、国家全体の方針となったような場合にはとくに、ヨーロッパ人による征服の対象となった土地や住民の悲惨、苦悩は言語に絶するものがあつた。大航海時代という人間の知力と意志力の最大限に発揮された華々しい表舞台の影には、植民主義の開始、原地住民の大量殺戮、奴隷制度のはじまりといった血にいろどられた裏の舞台も平行していたのである。人文主義という人間尊重の思想をその大きな柱のひとつとして発達してきたルネッサンス文化の帰結のひとつが人間の残虐性と獣性の組織的な、世界的な規模での行使となつたのは歴史の逆説的な皮肉であつた。

大航海時代の文献には、とくにアメリカ大陸におけるスペインのインディオ征服以後、政府およびその周辺の人々によって書かれた記録、報告書、歴史書には、侵略者の姿を美化し、擁護し、あるいはせいぜい客観的に年代記風に記述しているものも多かった。しかし、植民地の現実の体験の中から、ヨーロッパ人の原地人に対する非人間的な支配に抗議の声をあげ、これを告発する声も生まれてきた。その最大の代表者のひとりには、バルメトロメ・デ・ラス・カサス¹⁰であつた。彼は、その有名な『インディアス史』その他の著作の中で、スペイン植民者たちの原地住民にたいする残虐行為を一切の粉飾を捨てて赤裸々に描き出している。

彼の『インディアス史』にはそのような場面がいたるところにある。

「彼ら(インディオたち)が山中へ逃げこむと、スペイン人たちの部隊は、彼らのあとを追って行った。そして女、子供を連れてくるインディオたちに追いつくと、老若男女の別なくこの人々を、まるで屠殺場で子羊たちを切り殺すのと同じように、いささかの憐みも感じることなく虐殺した。先にも述べたように、インディオとの

戦争においては、スペイン人たちの間には、各人の思いどおりに振舞うのではなく、途方もない、グロテスクなまでの残酷さを発揮することが掟となっていたのである。それは、インディオたちに、スペイン人たちのために強いられた不幸な生活に由来する悲しみや恐怖を一時も忘れさせないように、彼らに一刻たりとも自分が人間であると思ひ出させないようにするためであった。そして、スペイン人たちは、自分たちの捕えた人々の両手を切りおとし、その切りおとされた両手を肩に結えつけて、『さあ、行け、お前の妻たちにこの手紙を運んで行け』と言った。彼らは多くのインディオたちの身体を自分たちの剣の切れ味を試すための実験台にし、そして誰の剣が一番よく切れるかと競い合せて、インディオを真二つに切り倒したり、あるいは一撃で首をはねたりして、しかもそれにお互いに金を賭けたりしていた。⁽¹³⁾

ラス・カサスの『インディアス史』には、いたるところにこういった顔を背けたくなるような残虐行為の描写があり、それにたいする著者の厳しい告発と抗議の態度は一貫している。ルネッサンス文化の生み出した積極的な側面、ヒューマニズムのひとつの具体的なあり方がこ

こに見られるのであり、それは二十世紀における、ヨーロッパの作家による植民主義の告発の文学（アンドレ・ジイド、グレアム・グリーンなど）へとつながる伝統であると考えることができる。

それでは、この時代には、ラサ・カサスのような新しい大陸の現実の中からの告発と抗議は、ヨーロッパ内部の文学にどのように反映しているであろうか。そのひとつとして、モンテーニュの『エッセイ』におけるスペイン人たちの行為への批判をあげることができる。第三章の第六章の一部は、新世界におけるスペイン人たちの行為の描写にあてられており、それにはたいするモンテーニュの批判は、ラス・カサスの激しい憤りにみちた文体とは異なり、ある種の距離を保った客観的な文体で貫かれているが、しかし、だからといってその批判そのものは決して浅いものとはなっていない。「またある時には、彼らスペイン人は同じ火で、いっきよに四百六十人を生きながらに焼き殺した。うち四百は庶民、六十人は地方の重だた貴族たちであったが、いづれも単に戦争の捕虜であった。我らはこれらの物語を、スペイン人自身より聞いたのである。……もし我らの信仰をひるめることが

目的であったとすれば、それは土地の所有によってひろまるものではなく、人心の掌握によってひろまるものであるということ、彼らは考えたはずである。そして、戦争が必要とする殺戮だけで十分堪能したはずである。

その上更に、平気で、あたかも野獣にたいするようにならざる所、剣と火薬のつづく限り虐殺を重ねるようなことは、しなかつたはずである。ところが彼らは、わざと鉱山掘りの仕事を行なわせるための哀れな奴隷となすべき人数だけしか生かしておかなかつたのである。」

ヨーロッパ人自身にたいするこのような批判の目は、さらに、異質の世界の人間である原住民の生活、ものの考え方などとヨーロッパ人の生活、ものの考え方との比較へと進み、やがて『善良な野蛮人』のモチーフをヨーロッパ文学にもたらすこととなる。

中世のように閉鎖されたヨーロッパ世界においても『異国人』は存在していた。ただ、この異国人は、地中海世界に近接して住み、戦争や通商を通じて交渉の深かつたモーロ(アラブ)人やトルコ人、あるいは少し遠くになってペルシア人などであった。それが、大航海時代になって、ヨーロッパ人の接する異国人は、アフリカ南端

の地域のカフィール人、アジアの東端の日本人、太平洋の彼方のインディオたちという風に拡がったのである。そして、この各地の異質の生活様式と文化伝統の中に住む人々との間にある場合には敵対、ある場合には友好的な関係が結ばれ、その中でヨーロッパ人たちはある場合には、異国人を敵意と軽蔑の眼で、ある場合には好意と賞讃の眼で見るといふ体験を重ねて行く。

そして、大航海時代によってそれまでの閉ざされたヨーロッパ中心の思考から、開かれた世界への視点を持つに至ったヨーロッパ人の最先端の部分には、ヨーロッパによって侵略を受け、あるいは奴隷制の中へ組みこまれようとしている世界の中にこそ、ヨーロッパよりもより高い人間性、文化がひそんでいるのではないかという考えが生まれてくる。こうして『善良な野蛮人』のモチーフが、モンテニユの『エッセー』をはじめとするヒューマニストたちの作品に見せる。そしてシニクスピアのオセローや、十七世紀のアフラ・ベインのオルノコーなどの悲劇的な英雄の文学形象から、ヴォルテールの『自然児』、啓蒙主義のルソー的「自然人」の觀念へ流れこみ、近代の社会思想や文学史の上ではかり知れ

ぬほど大きな役割を果すことになる。

そして、このような大きな文学的モチーフの発端に、例えば先にあげたラス・カサスの『インディアス史』における、多くのインディオたちの英雄的な人間像が立っているといっても決して言い過ぎではないであろう。

五

以上、主として地中海世界の枠を越えて外へ出たヨーロッパ人の体験とその体験の記録に表れた新しい要素について考察した。そして、そのような新しい感受性や人間考察、世界感覚がその後のヨーロッパ文学に導き入れることになったいくつかの問題をあげて、この小論の結びとしたい。

すでに『ラサリリーヨ・デ・トルメス』の冒頭に主人公の未亡人になった母親が、黒人とねんごろになり、主人公に色の黒い弟が生まれるというエピソードがあるが、このようにヨーロッパの生活環境の中に入ってきた異質の世界の人間、すなわち、『善良な野蛮人』の象徴としてではなく、生身の人間として白人社会の中に暮さねばならない異国人の問題は、すでにこのルネッサンス期に

萌芽的にとりあげられている。シェイクスピアの『オセロ』もある意味ではこの問題に本質的な関連をもっていると考えることができる。しかし、その後のヨーロッパ人の自己中心的な観念から、またヨーロッパ内部には黒人にせよ、他の異邦人にせよ大量に入ってくることはなかったという事情からも、この問題は十九世紀、本格的には二十世紀になってアメリカにおける黒人文学においてはじめて真剣にとりあげられることになる。ただし、ヨーロッパ社会に融けこむことのない異質な人間としてジプシーの姿がすでにセルバンテスにおいて描かれ、後にプーシキン、ジョージ・ボローなどにヨーロッパ社会内部の「自然人」として登場している。

大航海時代の結果、とくにアメリカ大陸の征服によってイベリア半島へ流入した金銀は、さらに人々の黄金への夢を掻き立て、民衆の中に冒険と成功への野心を生み出す。こうして多くの人々は、それまでの田園での仕事を打ち捨て、海の彼方での冒険へと乗り出して行く。そして、現実にはヨーロッパ本土に留まっている人々の間にも、日常の現実を背に向けた、冒険の気風が拡まり、それはスペインにおける騎士小説の隆盛を文学の世界へ

もたらすことになる。航海時代に培われた現実感覚とは逆行するこのような文学現象が、まさに大航海時代の結果のひとつであったことは歴史の皮肉であるが、しかし、このような騎士小説のパロディとして、最初の本格的な近代小説『ドン・キホーテ』が書かれることになり、また、現実感覚を失なった貧乏貴族たちの姿はピカレスク小説に恰好の材料を提供するようになる。

新大陸からの金銀の流入は、イベリア半島においては一部の上層階級に富と贅沢をもたらしただけで、国内産業の確立には役立たず、スペインは植民地からの金銀がネーデルラント、イギリスなどへ北流する単なる経由地となり、庶民の生活は低い水準に留まったままで、農村経済の崩壊から生じた一部住民の浮浪者化が生じた。そして、このような浮浪者、生きるために様々の職業につき、犯罪の世界にも足を踏み入れるピカロを主人公とし、その時代の現実を社会の最下層の立場から描いて行くピカレスク小説が生まれた。ピカレスク小説は、経済的貧困そこから生じる道徳的および社会的結果、飢え、放浪などの多様なイメージをひとつの筋をもつ物語にまとめようとするはじめての試みであった。それはまた一方で

アウグスチヌスの『告白録』にはじまるキリスト教的聖者伝のパロディという散文精神の上に成立したという側面も持っていた。そして、このすぐれて諷刺的な、外向的な小説形式は近代ヨーロッパ小説の主流の座を占めることになり、現代にいたるまでその生命力を保ちつつづけている。

最後に、大航海時代がもたらした「島」のモチーフは、この大航海時代以後の文学において大きな役割を果たすことになる。もちろん、「島」のモチーフは古典ギリシア以来ヨーロッパ文学に存在していたが、しかし、たとえばホメーロスの『オデュッセイア』においては主人公が遍歴の途中で立ち寄るだけのかりそめの冒険の場、あるいは『ダフニスとクロエー』のような牧歌の舞台としての意味を持っていたのに対して、ルネッサンス期の文学においては、島が、作品の主人公たちがそこを支配することを目指して進む目的の地、あるいは作者の社会的理想を具体的な理想郷のイメージにおいて描き出すための舞台となる。サンチョ・パンサがドン・キホーテに従って行くことを承諾した大きな動機のひとつは「島の太守」になることであったし、そして、事実、ある村に過ぎない

いとはいえバラタリア「島」の統治者になるのである。しかし、島のモチーフがこの時代にもっとも多く用いられたのは、トマス・モアにはじまるユートピア文学であり、かつてのプレスター・ジョンの国の神話やエル・ドラードの夢などが消えた後に、ヒューマニストたちの現実批判や社会的理想の実現の夢を託す文学的フィクションとしてユートピア「島」が大きな役割を果すことになる。

以上、大航海時代がヨーロッパ文学にもたらした新しい要素について簡単に触れた。まだまだ多くの問題がとりに上げられるべきであるが、重要なことは、大航海時代を通じて、それまで狭い地中海世界に閉じこめられていたヨーロッパ人たちの世界感覚と認識の枠が異質の世界との接触によって打破され、質的に新しい世界像、人間観が生み出されたこと、そして近代の文学の出発点のひとつがそこにあったということである。

- (1) ダンテ、神曲(平川祐弘訳)、河出書房、一二七ページ
(2) ボッカチオ、デカメロン(柏熊達生訳)、河出書房、七五ページ

(3) Edgar Papu, *Calatoriile Renasterii si noi structuri literare*, Bucuresti, 1967, p. 57—58 からの引用。

(4) *Ibid.*, p. 58 (同右)

(5) 増田義郎、新世界のユートピア、研究社、第三章(中世人の世界像)一五ページ以下。

(6) Father Francisco Alvarez, *Portuguese Embassy to Abyssinia* (Works issued by the Hakluyt Society), New York, p. 35

(7) *Ibid.*, p. 71

(8) *Portuguese Voyages 1498—1663*, Edited by Charles

David Ley, London-New York, 1960, pp. 257—258

(9) アビラ・ピロン、日本王国記(佐久間正・会田由訳)、大航海時代叢書、第十一巻、岩波書店、四三七ページ。

(10) 思想家および政治家としてのラス・カサスについては増田義郎氏の上掲書「新世界のユートピア」、第十一章以下に興味深い叙述がある。

(11) Baprotome De Jac Kacac, *История Индии*, Ленинград, 1968, стр. 62

(12) モンテーニョ、随想録(関根秀雄訳)、新潮文庫、第五巻、一四八三ページ

(東京大学助教授)